エデンの苑

桶明日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エデンの苑

【Ｎコード】
Ｎ９０６８Ｘ

【作者名】
桶明日

【あらすじ】
彼女が僕の前から姿を消して一年――西暦は２１９７年になっていた。
区域Ｃの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよいよ強く警鐘が鳴り響いていた。

1

序章　～過去の残滓――ＮＯＫＯＲＩＫＡＳＵ～

1

都会の蝉は鳴くのが遅い。

コンクリートの壁に、地面に、わんわんわんわんとその鳴き声が沁み入る午後のこと。

僕たちが歩く通りには、点々と人為的に木々が植えられていた。頭上を仰げば、その緑が日光に透かされて光っている。

「あつっ……」

拭っても拭っても額に汗が滲む。眉を、睫毛を、通り越して目に入った雫が目にしみて、やけに痛んだ。

「暑いねー」

のんびりと、どこか間延びした口調で、隣を歩いていた女が言った。

その声でようやく存在を思い出し、僕はちらりと横を一瞥する。

頭から背にかけて流れるのは、細くて柔らかい髪。今はその髪も、ぎらぎらした真夏の日差しを眩しく反射させている。更に、この夏の盛りにあっても日焼けしない白い頬が、それでも炎天下のためにほんのりと赤く色づいていた。

「暑いねー。氷流君、暑くない？」

彼女はひょい、と僕の顔を覗き込む。くるくるした瞳が、真っ直ぐにこちらを見つめていた。

僕は思わず目を逸らした。

「だから、さっきから暑いと言ってるだろ」

あれ、そうだっけ、とその女――白星苑華は笑う。しかしその笑顔もすぐに引っ込んだ。

「何でこんなに暑いんだろ……。テレの不調かな？」

「いや、ある程度暑くないと、季節感覚がなくなるだろ」
苑華の言っている『テレ』とは『ＴＥｍｐｅｒａｔｕｒｅ　ＲＥｇｕｌａｔｅｒ』――即ち温度調節器のことだ。
僕たちの住む区域Ｃは、この国の中枢部と言っても過言でない所だった。故に、環境には恵まれていた。
区域Ｃでは、まず、中心に政治都市がある。説明するまでもないが、そこは国の政治を執り行うための場所だ。次に、それを囲むようにして、事業都市、産業都市があり、ようやく住民都市が広がる。そして、その住民都市を更に覆うようにして存在するのが――壁だ。
壁と言っても、万里の長城のようなものを想像されては困る。壁とは比喩であって、実際にそれがそびえ立っているわけではない。軍事都市があるのである。区域Ｃは軍事都市によって、その外の区域と隔てられているのだ。
つまり、僕らの安心と富に満ちた生活は、大きな籠の中で送られているということだけ、分かってくれればそれでいい。
さて、前述したように、区域Ｃという籠の中は複数の重要都市があるわけで、そのために何不自由なことないように、人為的に環境を適宜調節していた。長い前置きになってしまったが、その一つが『テレ』というわけだ。
つまり、区域Ｃの中で、熱中症などの体調不良を起こす人間がいないように、テレによっていつも適切な温度となるべく設定されているのである。もっとも、四季の変化がないと物足りない、ということで一応、それも考慮に入れてあるらしい。要するに、人間の欲は限界を知らない、ということだ。
他にも、区域Ｃの中には数多くの設備がある。台風や豪雨がくるのを防ぐために、事前に大規模な低気圧を察知したら、その気圧をコントロールし災害を和らげる、『プレ』。地盤プレートの微細な動きや歪みを感知し、地震を予測する『地震予知機』――通称モリタ５。これはこの地震予知に世界で初めて成功した、日本人物理学者の名から取ったらしい。『５』というのは、予知機は開発されて

から何度も改良されており、現在、五世代目ということだ。
勿論、設備は自然災害対策だけに留まらない。木々や小さな花の一本、作られた自然に住まう動物達や虫の一匹に至るまで、細かくその数が計測されており、増えすぎず減りすぎないよう、監視・制御されている。
また、人間が住まう街には至るところに、監視カメラがつけられ、犯罪を防止すべく働いている。更に空気が汚れないよう、漂う汚染物質を浄化し、浄化できない分は区域Ｃの外に吐き出す。
見えないもの――即ち情報に関して言及すれば、それには全てフィルターがかけられている。薬や武器など犯罪に繋がるもの、人の堕落を著しく誘うと判断された猥褻なもの、そして賭博に関するものに至るまで、垂れ流しできないようになっている。区域Ｃを流れる情報は、一度、情報部を経由して吟味された後に、許可されたのみのものだ。それは決して、間違ったことではない。世の中に醜悪なものを蔓延させないための、必用な手段なのだ。
区域Ｃの中にある設備は、これら以外にもまだまだ存在しているが、ここで説明する必用はないので、省略しておく。
とにかくこれらの設備のお陰で、僕らの籠は、一点の染みもなく、汚いもの、穢れたもの、卑しいものが存在しない、清らかな世界として成り立っている。それは人間が人智を尽くして創造した、完璧な楽園だった。

2

突然、隣に人の気配がなくなったので、僕は立ち止まる。振り返ると、数歩後ろで、苑華が自販機相手に格闘しているところだった。

僕は彼女の側まで歩み寄る。

「なにやってんの？」

「チップを受け付けてくれないの。おかしいな……」

苑華は機械から拒絶されたチップを引き抜くと、その端子に息を吹きかけた。そしてもう一度差し込む。すると、小さな台の上に立体映像が映し出された。

「げ、あと二百Mしかない」

苑華はぶつぶつ言いながら、ジュースのメニュー番号を入力する。浮かび上がった二百の表示が百八十まで下がった。

スライドしてきた棚の上に、オレンジジュースのカップが二つある。彼女はチップをチェーンに通して首から下げた後、カップを手に取った。

「はい、一つは大好きな氷流君にプレゼントです」

そんな台詞を臆面もなく言いながら、僕の方にカップの一つを突き出す。僕はそれを受け取った。

「ん、ありがと」

「そこに座ろ」

レトロな雰囲気を漂わせる――しかし、妙に場に不釣り合いな――木製のベンチを、苑華は顎でしゃくった。

太陽の位置の関係で、丁度良く自販機が影を落としてくれている。涼しいとは言い難かったが、それでもいくらかはマシになった。

頭が暇らしい通行人達が、僕らの方をちらちらと見ながら、通り過ぎていく。

一応、断っておくが、僕らは俗に言う『恋人同士』という馬鹿馬鹿しくも甘ったるい仲ではない。僕も苑華も大方、一般人とはズレ

た感覚の持ち主だったから、そんなものの必要性を感じなかったのだ。
わざわざ相手を束縛しあってどうする。そんな煩わしいものはまっぴらごめんだ。
「んね、氷流君」
不意に、苑華が話しかけてきた。僕は目だけを向ける。
「何？」
「私こと、白星苑華さんは、氷流君にご報告があります」
彼女はそう言うと、ひらりとベンチから立ち上がった。彼女の右半身だけが、日に照らされて眩い輪郭を描いている。
「私ね、ここを離れてずっと遠くに行くの。区域Cの外に出るんだよ。お養父さんのとこに行くの」
「はぁ？」
あまりにも突飛すぎる話について行けず、僕は一瞬、思考が止まった。
苑華に実の両親はいない。そのため暫くは施設で育ったが、十歳の時に今の養父に引き取られたと聞いている。だが、その養父とも現在は離れて暮らしており、彼女は長いこと一人暮らしの状態だった。
「お養父さんって……今更」
僕が絶句していると、苑華は説明した。
「実は私を引き取ってくれたお養父さんは、は情報社の大手――エデンカンパニーの神谷紫苑社長なんです。凄いでしょう？」
僕はまた驚く。
その名前は聞いたことがあった。無名の情報社を、僅か二年足らずで大手に成長させた強者だ。年齢は四十過ぎといったところだっただろうか、それなりに社会の情勢に興味を持つ人間なら、誰でも知っている有名人だ。
情報社というのは、文字通り情報を商品として販売する会社である。売られる情報には、新聞、雑誌、書籍、音楽、画像、果ては研

究論文まである。エデンカンパニーの場合は、確かその中でも、研究に関する情報が主な商品だったはずだ。

情報社が世間に認められて、会社として成り立つのは簡単なことではない。区域Ｃでは検閲があるから、発信する情報には制限が設けられている。有害なものはないこと、かつ、国民にとって有益なものを発すること、というそれらの条件をクリアした会社だけが、公に認められてＪＤＳの称号を取ることができる。ここで初めて、一般に流通する情報を販売することができる、というわけだ。

数年前まで、主な情報社は二つしかなかった。厳しい制度のため、誰かが新しく情報社を立ち上げようとしても、政府の認可が降りず会社として成りたつ前に立ち消えになったり、或いはそのＪＤＳの称号を得るために、莫大な投資をして体制を整えようとした挙げ句、会社を運営していくための資金が底を尽き、結局潰れてしまったり、他の二社の情報社に敵わず倒産したりするのがオチだったのだ。ところが、エデンカンパニーはそこに台頭してきたのである。最初は誰しもが、また潰れてしまうだろうと思っていたが、エデンカンパニーは持ちこたえた。それどころか、それまであった二つの情報社を凌ぐ勢いで成長していったのだ。それは偏に、社長である神谷紫苑の手腕によると言われている。

3

もっとも、一定の分野の中で、神谷の知名度が高いのは、それだけが理由ではない。神谷は区域Cの外の人間なのだ。大会社の社長でありながら、Cに住むことのない、いわば変人だった。彼曰く、事業が密集するCの中で開発を進めれば、企業秘密を盗まれてしまう、とか。それが転じて、一部の人間の間で、公にはできない研究を取り扱っているのだ、いや或いは裏で政府と繋がっていて重大な国家研究に取り組んでいるのだ、とまことしやかに囁かれていた。

とにかく、そんなテレビや新聞でしかお目にかかれないような有名人に、苑華が引き取られていたなんて、驚嘆すべきこと以外のなんでもなかった。

「何で今まで黙ってたわけ？　てか、それマジなの？」

苑華は大真面目な顔でこっくり頷いた。その拍子に、長い髪がさらさら揺れる。

「マジだよ。私、氷流君には嘘吐かないもん」

僕はどう返事をしていいのか分からず、唾を飲み込む。その音がやけに耳に響いた。

彼女の瞳は真摯そのもので、とても嘘を吐いているようには見えなかった。ただ、全てを語っているわけではないようにも思えた。

「だから、氷流君のことは大好きだけど、あと一ヶ月でお別れです」

「なに？　お前、俺のことが好きなのに、どっか行くの？」

意地悪く言ってみる。苑華はその軽口に反応する様子もなく、ごく普通に答えた。

「今すぐって、わけじゃないけどね。私、お養父さんのとこで、幸せに暮らすんだよ。羨ましいでしょう？」

彼女はにこにこしていた。僕は馬鹿だから、そのにこにこしている顔を見て、ごく素直にこいつは幸せなんだと思った。だから僕ににこにこした。

「いや別に、勝手にしてくれって感じ」
「何それ、冷たーい！」
苑華は声を上げてまた笑った。
頭上で木々がざわめきを起こす。吹いてきた風は熱気を帯びていて、あまり気持ちの良いものではなかった。
「お別れの記念に、一ついいことを教えてあげましょう。私はもう一つ名前を持っていて、昔、『エデン』と呼ばれていました。楽園って意味なの。言わなくても知ってると思うけど」
それは初耳だったが、僕にとって特に興味を引くような話ではなかったので、適当に受け流していた。また、こいつの下手な冗談か、事実を脚色した小話だろうとしか思っていなかったのだ。
「何はともあれ、白星さんは氷流君とはお別れです。寂しいでしょう？」
「いや別に」
反射的に即答してしまう。苑華は今度は笑わなかった。
「やっぱり冷たいね……」
蝉のじりじりいう鳴き声は、ますます辺りをうるさく満たし、日差しはいよいよ強く照りつけていた。

それから一月後、苑華は本当にいなくなった。
いなくなって初めて、実は自分が彼女に惹かれていたことに気付いた僕だったが、もはやどうしようもなかった。
しかしその想いも次第に薄れていくようになり、彼女のことを思い出す回数は減っていったのだ。僕みたいな奇人に、どういうわけか、犬みたいにつきまとっていた変わった女がいたなと、ただその程度だった。
そう、その程度のはずだったのに……。
彼女が僕の前から姿を消して一年――西暦は２１９７年になっていた。
区域Ｃの外にある世界の退廃は、益々留まることを知らず、いよ

いよ強く警鐘が鳴り響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9068x/

エデンの苑

2011年10月25日02時06分発行